

叔父マックスのハンブルクの銀行で営業陣入りをしたのは30年春である。34年3月、永年の知己、フォン・ノイラート外相にユダヤ人の不法逮捕を難詰した時、今を時めくナチ外相の答えは次のものだった。「君、僕も政治的な信頼を完全に得ているわけではないのだよ」。SGW が直ちに家を整理し、急遽妻子とともにロンドンに向かったのは3月31日である。

SGW の神話のひとつ、着の身着のまま、有金5000 ポンドで英客船に飛び乗った『逃亡綺譚』は本人の創作のようでもある。しかし、58年、シティを二分した稀代のM&A合戦、英アルミ社と米レイノルズ社の乗っ取り合戦で、SGW は、ハンブロス、ラザール、モルガン、モンターギュ等々引受け業者上位17社中14社を敵にまわして、ついに英大産業を奪取したのであった<sup>(注16)</sup>。『ドイツ系ユダヤ人の戦後の成り上がり者、SGW』はこの事件で躍シティの頂点に登りつめたのは創作では全くない。

一方、前記の次男家銀行は災厄続きだった。ナチの強圧下、ハンブルクの銀行実権を総支配人ルドルフ・プリンクマンと取引先肥料輸出商パウル・ヴィルツに捨て値で譲り、マックスは銀行を38年5月30日に離れ、8月末米国へ逃亡した。マックスの長男エリックはその1週間前に「ちょっとスウェーデンまで」の小旅行のつもりが米国への大逃亡行となり、故郷との永年の別離となつた。マックスの末弟、フリッツは官憲の眼をかすめて夫人の母国スウェーデンに辛うじて身ひとつで逃亡した。米国籍を取得したエリックは欣然と兵役志願に登りつめた。

歐州各地で戦して45年5月、捕虜専門担当中佐として、かの空軍元帥ヘルマン・ゲーリングをアウグスブルクで2日間、約20時間にわたり尋問する<sup>(注17)</sup>。歴史の皮肉である。同元帥は後日、監視の眼を盗んで服毒自殺してた。マックスは46年、ニューヨークで客死する。戦後、ハンブルクへ帰ったエリックは、果然として他人の銀行となつた自分の銀行を発見する。戦中の42年、プリンクマン・ヴィルツ銀行と改名された銀行経営権をプリンクマンは譲せず、エリックはロンドンの SGW と共同して「戦争状態」<sup>(注18)</sup>に入り、ようやく70年に M. M. ヴィアープルヒ・プリンクマン・ヴィルツ銀行<sup>(注19)</sup>と改名するまでにこぎつけた。不満のままエリックは82年銀行を退き、長男マックスは父の努力を継ぎ、エリックの死後91年10月1日、ようやく M. M. WARBURG

の旧行名がハンブルクに復活した。半世紀にわたる銀行争奪戦はここに終った。

ジークムント家にとって82年の SGW の死後の運命は苛酷だった。95年に入イスの銀行 UBS の傘下に入り、僅かにウォーバーグ・ディロン・リードの名をとどめるにすぎない。他方、かのモルガンと競ったクーン・ロープ・NY もリーマンに合併され、さらにシェアソン・リーマン・アメックス社となってウォーバーグの名は米英から消滅しかけ、僅かにハンブルクが旧名を維持しているのみである。

マックスは言う。「SGW は結局、株式公開後、支配可能分は 2 %となり、ついに外部の大資本に圧倒された。私はそんなことをするつもりは全くない。74年のヘルシュタット個人銀行倒産後<sup>(注20)</sup>、ドイツの個人銀行は急減した。個人銀行は社会経済の変化に敏感に対応せねばならない。残念ながら、この25年間は多くの個人銀行については鋭敏な感覚と迅速な対応という点で欠けるところが多かったと思う。私はそれらの轍を踏むつもりは全くない。大小を問わず、銀行は固有のカルチャーをもつ戦闘組織だから対等合併は本質的に無理なのだ。全家系のうちで私の銀行のみが次世代に向けて生き残った。ヴァーブルヒ家の家名と全家族について重い責任を感じている。ヨーロッパ、特にドイツでのユダヤ系銀行経営は、大銀行大合併の嵐の中で、日本人には理解しがたい、表現しきれない問題がないわけでもない。父エリックは偉大なドイツ人でありつづけたいと、ある意味で儘い努力をしたユダヤ人の一人だったが、私は父を心から尊敬している。ヨーロッパ、特にドイツでのユダヤ人のあり方は難しい問題が残っていると思う。さて、88年、リヒアルト・フォン・ヴァイツゼッカー西独連邦大統領が病床の父エリックを訪れて、暖かい言葉をくれました。父は尊敬されるドイツ人として心おきなく死んだと思っています。母（旧姓ドロテア・トルシュ）は高齢ですが、まだ元気であります」。

ヴァイツゼッカーと老エリックの会話は余入を交えずに数分続いた。終始、大統領は老ユダヤ人銀行家の両手を握っていたという。そしてエリックはその翌々年まで生き抜いた。

別れを告げて出た湖岸に煙のような粉雪がまだ舞っていた。同行の屋上に翻

えるハンブルク州旗は灰色の空を背景に、目にしみるような鮮やかな真紅だった。

## 〔参考書目〕

- ① 今井清孝「マーチャント・バンカーズ」上・下巻、東京布井出版、1979。
- ② J. ウェッシュバーグ（今井清孝訳）「マーチャント・バンカーの内幕」日経；1970。（翻訳は全訳ではない）
- ③ 大島清「高橋是清、財政家の数奇な生涯」（1969）（1999復刻版）、中公新書
- ④ 鹿島守之助「日本外交史第7巻日露戦争」鹿島研究所出版会、1970。
- ⑤ 木村昌人「高橋是清と昭和恐慌」1999、文春新書
- ⑥ 及能正男『ダルマさん・高橋是清の写真』「貿易政策」貿易弘報社、1979（9月号）。
- ⑦ 高橋是清（上塚司編）「高橋是清自伝」上・下 中央公論社、1976。
- ⑧ 津島壽一「芳塘隨想第九集」『先輩・友人・人あれこれ巻一、高橋是清翁のこと』芳塘刊行会、1962。
- ⑨ 土屋喬雄「シャンド——わが銀行史上の教師」東洋経済新報社、1966。
- ⑩ 日本銀行「日本銀行八十年史」同行、1962。
- ⑪ 日本財政経済研究所「日本金融財政史」同所、1957。
- ⑫ 布目真正「マーチャント・バンキング」キンザイ、1976。
- ⑬ 藤村欣市朗「高橋是清と国際金融」上・下巻福武書店、1992。
- ⑭ 吉野俊彦「歴代日本銀行総裁論」毎日新聞社、1976。
- ⑮ D. ウィルソン「ロスチャイルド、富と権力の物語」上下巻、本橋たまき訳、1995、新潮文庫
- ⑯ E. Rosenbaum "M. M. Warburg & Co. Merchant Bankers of Hamburg" (Offprint from year book VII of the Leo Baeck Institute of Jews from Germany, London 1962).
- ⑰ E. Rosenbaum, A. J. Sherman "M. M. Warburg & Co. 1798–1938" C. Hurst & Co. Ltd, 1979. London.
- ⑱ Max M. Warburg "Aus meinen Aufzeichnungen" unpublished text by M. M. Warburg. Brinckmann, Wirtz & Co. Hamburg 1952, edited by Eric M. Warburg.
- ⑲ Ron Chernow "The Warburgs, A Family Saga; The Twentieth Century Odyssey of a Remarkable Jewish Family" PIMLICO, Random House, 1993, London (邦訳「ウォーバーグ、ユダヤ財閥の興亡」青木英一訳、上、下2巻、日本経済新聞社1998)
- ⑳ "M. M. Warburg & Co. 1798–1998, Die Geschichte des Bankhauses" niedergeschrieben von Eckart Klessmann, M. M. Warburg & Co. 1998 Hamburg
- ㉑ S. Chapman "The Rise of Merchant Banking" 1984 Unwin Hyman, London (邦訳あり)

## 〔注　　記〕

(注1) M. M. Warburg & Co. Hamburg の銀行名はドイツ現代史の変遷そのままに次のごとく変更された。